

村雨

MURASAME Ittetsu Takemura

1. 村雨/Murasame (I.Takemura)
2. もず/Mozu (A.Ogaeri)
3. A (I.Takemura)
4. Black Bats and Poles (J.Walrath)
5. RM (I.Takemura)
6. Spiral Dance (K.Jarrett)
7. Lost Visions (A.Ogaeri)

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at NK SOUND TOKYO
on 9,10 February 2021
Recorded & Mixed by Neeraj Khajanchi
2nd Engineer: Kenjiro Naka
Mastered by NK @ AQA Mastering

Art Direction & Design : Hiroshi Kurisaki
Cover Art : Koji Kakinuma
Photograph : Takeo Hibino

Special Thanks : Office Kakinuma, Inc

竹村 一哲
Ittetsu Takemura
drums

三嶋 大輝
Daiki Mishima
bass

魚返 明未
Ami Ogaeri
piano

バンドを結成して1年半。
最高のメンバーと気持ちの良い一体感が
生まれています。彼らとともに自然体で
レコーディングに臨みました。
生々しく漢らしい演奏を
お楽しみいただけたら嬉しいです。

竹村 一哲
Ittetsu Takemura

井上 銘
May Inoue
guitar
appears by the courtesy of
ReBorn Wood Inc.

祭り太鼓のように

2019年7月、自身初となる新宿ピットイン2Daysに臨んだ竹村一哲は、初日のプログラムにこのカルテットを選びました。運よく現場に居合わせ、年甲斐もなく興奮したばかりは、翌朝彼にメールを打っています。レコーディングをオファーするためでした。

はじめて見るバンドに、いきなり“ジャズ・センサー”が振り切ってしまったのは、この日の演奏がそれほどスリリングだったからですが、それだけではありません。バンドにケミストリーが生まれる瞬間をメンバー自身が驚き楽しむ姿に共感したこと、さらにはミュージシャン同士の化学反応を目の当たりにした観客がとても楽しそうにしていたからです。

ステージ上でこれほど嬉しそうに演奏するバンドはほとんど見たことがないし、客席のリラックスした熱気もどこかいつもとちがう。地下の小さなジャズクラブにいるのに、まるで野外フェスを見ているかのような不思議な空気に包まれていたのです。どこか祭りの気配を感じる夜でした。

とはいえ、バンドサウンドは少々荒削りで、ジャムセッション的な匂いも残っていました。無理もありません。じつはこの日のギグはまだ2回目。ピットイン2Daysという晴れ舞台に恵まれ、「東京でリーダーをやるならこの4人で」と1年も前から構想していたメンバーをようやく集めることができた、というのがこのバンドの成り立ちだったのです。

それから1年半。彼らはギグを繰り返し、準備を整えてこのレコーディングに臨んでくれました。息はびったり。しかし、けっしてルーティンに堕していない。そこがこのバンドの魅力です。

竹村一哲は札幌の出身。小学5年で創設されたばかりのビッグバンドに入団するとメキメキと頭角を現し、中学2年のころにはジャズクラブのセッションに顔を出すようになりました。典型的な“神童系”ミュージシャンです。地元バンドのレギュラーになり、親の世代からジャズの基本を叩き込まれたのもこのころ。中学を卒業した瞬間からギヤラをもらうようになり、名実ともにプロの仲間入りを果たします。

ところが、そんな早熟ジャズ少年が好きで聴いていたのは、Led Zeppelin、Deep Purpleといったハードロックや、Tower of Powerなどのファンクでした。どうやら本音ではジャズをダサいと思っていたらしく、「ほんとはオレ、こういうのをやりたいわけじゃないんだよな、と思いながらズルズルやっていた」とのこと。

中学を卒業するころ、そんな彼をコルトレーンの「至上の愛」がジャズの虜にします。音楽的なことは皆目わからなかったけれど、エルビン・ジョーンズがバタバタ叩いているのを、シンプルに「カッコいい!」と感じたのです。

「エルビンのドラムがロックに聞こえた。ロック魂を感じたんです。オレもエルビンみたいに“バタバタ、ドシャーン!”って叩きたい。そう思ったんですよ。いかにもジャズっていう“チンチキ、チンチキ”じゃなくね」。

時をおなじくしてプレイヤーとしての転機が訪れます。きっかけは板橋文夫との共演でした。教えられたとおりにそれっぽく叩いていたら、つまりは“チンチキ、チンチキ”やっていたら、「もっとでっかく叩くんだよ!」と怒鳴られたのです。

「板橋さんと出会ってハジけることができた。ジャズって自由に表現してもいい世界なんだとはじめて知った。縮こまって“ジジイみたいなドラム”を叩いていた自分を解放してくれたんです。心底楽しかった」。

その後、来札した一級ミュージシャンとの共演を重ね、腕を磨いていきます。渡辺貞夫に迎えられたのは21歳のとき。知り合って10年、レギュラーになって5年。いまでは貞夫バンドに無くてはならない存在です。

竹村一哲はまだ30歳を超えたばかり。トップドラマーのポジションを手にするいっぽうで、あらゆる変化・成長の可能性を秘めた日本ジャズ界きっての逸材です。

そんな竹村一哲が招集したのは、だれもが認めるギター界のニューリーダー井上銘、若手

随一の実力との呼び声も高い魚返明未、个性的かつアグレッシブなプレイで引っ張りだこの三嶋大輝。いずれもシーンの先頭を走る同世代のトッププレイヤーです。

若き精鋭で固めたこのキャスティングはじつにイケている。攻める姿勢がメンバーの顔ぶれに表れている。いったいどんな戦略やヴィジョンのもとに彼らを選んだのか？ そう問うべくに、彼は笑みを浮かべてこう答えました。

「あ、そういうの、ぜんぜんないです(笑)。彼らを選んだのは、“こういうことをやりたいから”ではなく、“このミュージシャンとやりたいから”。“目指すサウンドの方向”みたいなものもあります。日によってちがっていいし、どんなふうに演奏してくれても構わない。オレの曲だからこうしてくれ、みたいなことも1回も言ったことないです」。

じっさいライブのときも、ソロオーダーさえ決めずに「好きにやろうぜ」という感じらしい。指示らしい指示、決まりらしい決まりがないまま、これほどエッジの効いたサウンドが組み立てられているとはにわかには信じがたいけれど、もしかしたら、この構図こそが、このバンドの強みなのかもしれません。

「みんな“飛び越える”ことを恐れないよね。急にひとりになったり崩壊しそうになっただとして、自力でなんとかできる人たちだしね。だからこのバンドはとにかくポジティブ。音楽的にどんな状況になろうと、だれもネガティブにならない。演奏していて、一度たりとも“負のエネルギー”を感じたことがない。そこはすごいと思う」。井上銘はそう言います。

「守りに入るのがいちばんダサイと思っているよね、みんな」。そう引き取った三嶋大輝が、リーダーとしての竹村一哲についてこう語ってくれました。

「このバンドは男らしい。思い切りがいいし、迷いが無い。だから気持ちいい。一哲くんの判断が早いからです」「どうやってくれてもいいよ、いつも彼は言う。そう言いながら、最後はぜんぶケツをもってくれるんです。それができるリーダーはなかなかいません」。

井上銘がつづけます。「誠実な、スジのとおった、信頼できるバンドリーダーです。最低限の

ことしか言わないけれど、短い言葉の奥にいろんな思いやたくさんの気遣いを感じる。そこがカッコいい」。

メンバーの力量と感性を信じてドクドクとグルーヴを放射しつづけ、彼らを背後から強い力でプッシュする。迷いのない“バタバタ、ドシャーン!”でバンドを鼓舞し、ポジティブなエネルギーで満たす。祭り太鼓のように。

それが竹村一哲の流儀です。もちろんそれができるのは、サイドを固める3人が、全体を考えながら行動できる秀逸なプレイヤーであり、なにが起きてもバンドを破綻させないだけの技術力を備えているからですが、最大の決め手は彼の楽観的でアグレッシブな精神でしょう。

保険をかけない。人目に媚びない。後悔しない。

保身や小賢しい計算とは無縁。それが竹村一哲の強度の力源だとぼくは考えます。

彼やメンバーたちの話を聞きながら、ぼくは岡本太郎の言葉を思い出していました。1970年大阪万博のテーマプロデューサーとして太陽の塔やテーマ館の準備に奔走していたときのこと。巨大な国家プロジェクトに萎縮し、堂々巡りを繰り返していた万博協会の役人たちを前に、こう言い放ったのです。

「成功しようと思ふな。及第点を取ろうなんて考えるな。60点取ったものが並んだって、ちょっと楽しくないじゃないか。思いっきりやりたいことをやればいいんだ。安全なものなんかつまらないだろ？ 失敗したっていい。0点でいい。その方がいいんだ。それが祭りだ。パーッと開くんだ」。

太郎の言葉は、関係者にアドレナリンを分泌させるに十分なものでした。それが“負のエネルギー”に占拠された空気をズバッと切り裂いたのです。

ジャズで大切なのは、及第点を取るのではなく、パーッと開くこと。ジャズは生きた祭りなんだから。きっと竹村一哲はそう考えているにちがいません。

平野 暁臣 (Days of Delight)
Founder / Producer